



Title	tout un N : 数量表現から強意表現へ
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

tout un N

— 数量表現から強意表現へ —

春木 仁孝

1. はじめに

本来は数量表現である<tout +不定冠詞+名詞> (以下 tout un N) という表現は、強意表現としても多用される。筆者は春木(2015)において強意詞としての tout について考察する中で、強意表現としての tout un N についても論じた。その際、数量表現としての特徴や、数量表現と強意表現の関係についても少し触れると同時に今後探求すべき問題点についても多少の指摘を行なった。本稿では改めて数量表現としての tout un N の特徴と問題点について考察し、春木(2015)で詳しく見た強意表現としての用法との関係についてもさらに検討を行ないたい。

2. 強意表現としての tout un N

まず、強意表現としての tout un N について春木(2015)をもとに簡単にまとめておこう。以下に強意表現としての tout un N の典型的な例をいくつか挙げる。

(1) Pour lui, cette rencontre était *tout un événement*.

(彼にとって、その出会いは一大事件だった。)

(2) Sa vie, c'est en fait *tout un journal*.

(Bat-Zeev Shyldkrot)

(彼の人生は実際、まるで新聞記事になるようなことばかりが起きている)

(3) Il savait bien que s'il sortait sa caméra, de nouveau il lui faudrait lutter avec le même, à coup sûr, il ferait *tout un cirque* pour la lui prendre, (...).

(Joncour, Serge (2013) *L'amour sans le faire* : 272. J'ai lu.)

(彼にはよくわかっていた。もしカメラを取り出したら、またこの子と争いになり、きっとこの子は彼からカメラを奪うために大騒ぎをするだろう。)

(4) — Depuis quand ? ((酒をやめたと聞いて) 「いつから酒をやめたの。」)

— C'est *toute une histoire*. («話せば長くなるよ。」)

(*L'amour* : 119)

(5) *Tout un roman* va s'élaborer autour de cette ombre.

(Bat-Zeev Shyldkrot)

(その不安(疑惑)をめぐって一大小説が展開されていくのであった。)

この構文で用いられる名詞は、affaire, histoire, événement, scandale, drame ように様々な出来事や事態をひとまとめにして指す名詞が多い。それは数量表現としての tout un N に用いられる名詞が、一般に équipe 「チーム」や maison 「家」などのようにメンバーや含まれる要素を持つ名詞であることが多いという性格をそのまま引き継いでいるためである。ただし、強意表現の場合は名詞の指示対象の部分や要素として

どのようなものが含まれるかは暗示されているのみで、いわば聞き手の想像に任されているという点が数量表現の場合と異なっている。

この強意表現が用いられている構文としては属詞構文が多い。また *faire* の目的語になっている場合や存在構文の場合もある¹。名詞句の性格から言えば、名詞句であっても指示的ではない属詞、または名詞句の指示対象が結果的に存在するようになる *faire* などの目的語、もしくは存在構文で導入される要素であり、発話時点で指示対象の存在は確立されていない。再帰構文自立用法である (5) の *tout un roman* も指示対象が確立された主語ではなく、結果的に存在するようになる *faire* の目的語と実質的には同じである。以上の構文的特徴から分かるように、<*tout un N*> という強意表現は、表現自体が指示的でないか、その指示対象の存在が先行文脈において確立されていないような構文でのみ用いられる。

強意表現 *tout un N* は、「例外的な N」「他に抜きでた N」「一大 N」「まるで N のようなもの」というようなニュアンスになる。さらにこの表現の文法化が進むと、(6) のように「真の N」「まさに N と言える N」のような解釈になる例も出てくる。

(6) Le fait qu'aujourd'hui deux Maliens soient respectivement à la tête de la Commission de l'Union africaine et de celle de l'UEMOA constitue *tout un symbole*.

(今日二人のマリ人がそれぞれアフリカ連合委員会と西アフリカ経済通貨同盟のトップについているという事実は、意味深いシンボルとなっている。)

この例の *symbole* には、指示対象を構成する要素や部分を考えることができない。このような例においては、*tout un N* は指示対象の内容や意味するところの豊かさ、深さ、複雑さを表わしていると解釈する必要がある。

3. 数量表現としての *tout un N*

3. 1. *tout un N* で用いられる名詞

数量表現としての *tout un N* という構造は、*toute une classe* 「クラス全員」や *toute une équipe* 「チーム全員」のようにメンバーを持つあるまとまりを指す名詞や、*toute une maison* 「家全体」、*toute une ville* 「街全体」のようにその指示対象が様々な部分や要素によって構成されている名詞と共に用いられる頻度が高い。つまり *tout un N* という表現は多くの場合、名詞が表わす指示対象の内部構造の複雑さや内部に含まれる要素の多さを前提としたうえで用いられている。それをひとまとめにしてコンパクトに把握・提示する手段として <*un* + 名詞> という単数形をとっているのである。そこからこの表現は量的には多さを、質的には複雑さを含意する。

¹ 動詞がない名詞表現の場合も、解釈的には存在構文や属詞構文と考えられる場合が一般的である。

この構造を、部分や要素を考えにくい物理的に小さな物（たとえば鉛筆やグラス）に対して用いることもできるが、その場合は以下のように内部構造とは関係なく、ある物全体を純粋に量的に捉えた用法になる。

(7) *J'ai mangé toute une pomme.* (リンゴを丸々一個食べた。)

(8) *Il suffit d'une goutte de vin pour rougir tout un verre d'eau.* (Victor Hugo)
(コップ一杯の水全体を赤くするには一滴のワインがあれば十分だ。)

(9) *Il a même écrit tout un livre sur ce sujet.*
(彼はそのテーマについてまるまる 1 冊の本を書きさえた。)

また、均質で内部構造を持たないか、内部構造が問題にならない物体を表わす名詞の場合は、以下のようにその表面積全体や材質の均質性を表わすと考えられるが、これは量的であると同時に質的でもある。

(10) *J'aimerais que le mur en soit recouvert ; j'ai retouché l'image pour qu'elle soit appliquée sur tout un mur.*

(私は壁全体がそれで覆われるようにしたい。壁全体を覆えるように私は写真を調整した。(注：写真をもとに壁紙を作ろうとしている。))

(11) *Et que diriez-vous de toute une chaise faite avec une seule et unique pièce en bois ?*

(全体がただ一つの木の固まりを用いて作られた椅子をどう思いますか。)

しかし、既に述べたようになんと言っても頻度が高いのは、以下のように部分や要素・メンバーによって構成されているものを指す名詞を用いた表現である。

(12) *C'est vraiment la victoire de tout un groupe.*

(これは本当にグループ全体が一丸となって得られて勝利です。)

(13) *Il porte les espoirs de tout un pays.* (彼は国全体の期待を背負っている。)

(14) *C'est toute une classe qui s'est mise contre moi. Je ne sais même pas ce qu'on me reprochait.*

(クラス全体が僕に敵対するようになった。僕にはみんながどうして僕をせめるのかさえ分からない。)

3. 2. 問題点

強意表現の *tout un N* については、名詞が属詞として用いられていて指示表現でないか、あるいは指示対象の存在が確立されていないという特徴があると述べた。しか

し、数量表現としても不定冠詞が用いられているということは、指示対象が不定ということになるのだろうか。(7)(9)のような場合はいわゆる特定の *specifique* な不定冠詞の場合と同じである。一方、(11)では実際にそのような椅子があつて発話者はその特定の椅子のことを考えて言っているとも考えられるし、またそのような椅子の存在を仮定して言っているとも考えられる。仮定している場合も、いわば発話者の仮想空間に指示対象は存在していると言える。さらに(10)では、発話者が具体的な壁を考えているのは明らかである。そもそも壁は先ず *le mur* と定表現で用いられている。その壁の形状にあわせて写真を修正しているのである。それではどうして *tout un mur* と不定冠詞が用いられているのだろうか。 *tout un N* という表現の問題点はまさにそこにあるのである。つまり具体的な指示対象が存在するにも関わらず *un N* という不定表現が用いられている場合が多いのである。(12)(13)(14)の例においてもそうである。自分が属しているチーム、その選手の国、自分が属しているクラスなのに不定表現になっている。(15)の a.b.c.はいずれも可能な表現だが、ここでも所有形容詞や定冠詞よりも *toute une équipe* という表現がもっとも一般的である。

(15) a. *J'ai toute une équipe* derrière moi. (私にはチーム全体がついている。)

b. *J'ai toute l'équipe* derrière moi.

c. *J'ai toute mon équipe* derrière moi.

(16)は記事の見出し部分である。この段階では読者はまだどこの高校のことかは知らないのだから、当然 *une classe* と不定表現になり、記事の中で具体的な地方名や学校名を知ることになる。(17)は飛行機事故の犠牲者の近所の人へのインタビューの出だし部分である。この段階でこの事故は大きなニュースになっており、ある一家が全員犠牲になったことも知られていた。文頭の *cette nouvelle* はまさにそのことを指している。従ってここで話者は *Toute la famille rayée de la carte* と定表現を用いても不自然ではないが、やはり不定冠詞が用いられている。

(16) Pourquoi *toute une classe* a raté le bac ?

(どうしてクラス全体がバカロレアに失敗したのか。)

(17) "Cette nouvelle m'a complètement abattu, c'est monstrueux. *Toute une famille* rayée de la carte, on ne s' imagine même pas que ça puisse arriver. Cette famille, on la connaît bien, les enfants sont à l'école avec les nôtres..."

(このニュースは本当にショックでした。ひどすぎる。一つの家族全員がこの世から消え去るなんて、そんなことが起こり得るなんて想像することもできない。この家族のことはみんなよく知ってました。子供たちはうちの子たちと同じ学校に行ってたし...。)

(11)では対象の存在を仮定している場合もあり得ると述べた。以下の例もその場合に類似している。これはたとえばある放送局で実際に起こっていることを一般化して述べているとも考えられるし、単なる一般論、理想論とも解釈できる。

(18) C'est l'appui de *toute une équipe* qui permet à des reporters de faire des enquêtes de large portée et de réelle profondeur.

(チーム全体の支えのおかげでリポーターが射程の広いそして本当に深みのある調査ができるのである。)

4. 不定性と全体性

3では *tout un N* が用いられるいくつかの場合について見た。そこで問題だったのは指示対象が存在していて、その存在が聞き手にも明らかな時にも不定表現が使われる例の存在であった。実際、指摘したように(15)のように定冠詞や所有形容詞を用いることができる場合でも不定冠詞が用いられる頻度をもっとも高い。これは *tout un N* という数量表現の意味によると考えられる。*tout le N* という表現では、存在が明らかな指示対象について「*le N* のすべて」という通常の全体性の意味を表わすだけだが、*tout un N* と表現することで、その指示対象をひとまとまりのものと一体的に捉えている点が全面に出てくるのである。つまりこの場合の *un* は不定冠詞というよりも数詞としての意味が強く前面に出てきているのである。(10)の例を思い出してみよう。発話者は自分の部屋の壁など特定の壁 *le mur* に自分が撮った写真から作った壁紙を貼ろうとしている。次の文ではその壁紙が壁全体 *tout un mur* を覆うように写真を修整したと述べている。どちらの *mur* という語も同じ壁を指示対象としてしているように見える。しかし不定冠詞の付いた *mur* はやはり直接にはその壁を指示しているとは考えられない。ここではむしろまるまる壁の全体なのかそうではないのかということが問題になっているのである²。言い換えれば具体的な壁が問題になっている状況で、壁という指示対象がいわば概念化、抽象化されて、壁という対象の表面の全体なのかそうでないのかという量のみが問題になっているのである。

(17)でも具体的にどの家族か名指しできるにもかかわらず、事故でみんな亡くなってしまって家族がまるまる消滅してしまうということに注目して述べているのであり、やはり *tout une famille* の *famille* は特定の家族を指すのではなく、抽象的なレベルで「一つの家族全体」と量的な表現の対象となっているのである。

(12)では「グループ全体の勝利」という表現の勝利はある特定の試合の勝利であるが、*la victoire de tout un groupe* は属詞であり指示表現ではない。これはどんな勝利

² 「全体なのか部分なのか」と書くと、部分はかなり小さな領域に解釈されてしまう恐れがあるので、あえて部分という言葉は使わない。完全にすべてなのかそうでないのか、ということが問題になるのである。

かという「グループ全体の勝利」であるという性格付けの表現であるので、やはり抽象化、一般化を経た表現である。(13)の場合は属詞でもないので、*tout un pays* は主語の指示対象が属する国に指示的に結び付きそうだが、やはり表現自体はどここの国ということは関係なく、その人物が属する国全体という量的な部分だけが問題になっているのである。(14)でも、クラスの中の誰がとか一部がではなく、クラス全体がという量的な部分だけに焦点が当たっているのであり、*toute une classe* は特定のクラスを指しているのではない。これらの表現が聞き手の理解においてある特定の指示対象と結びつくのは、あくまでも当該のコンテキストの理解を通してであり、言語表現として直接に具体的な指示対象と結びついているわけではない。以上の事がよくわかる例をもう一つ挙げておく。ニュースの見出しである。

(19) *Grève nationale en Belgique, tout un pays paralysé.*

(ベルギーでゼネスト、国中が麻痺状態。)

ひとまずは特定の指示対象と説明した(7)や(9)でも、結局は量に焦点があり、単に本を書いたということよりも、本一冊全体をあるテーマについて論じるために書いたということを伝えるのが(9)の発話の意味である。従って、ある本を見せて、*Regarde ce livre.*「この本見て」と先ず言って、そして(9)を続けて言っても全く問題はない。つまり厳密には(7)や(9)の *un* も、特定の不定冠詞ではないのである。

5. 数量表現から強意表現へ

5. 1. 名詞の性格

以上で見たように *tout un N* という表現は、理解の過程において間接的に特定の指示対象と関係づけられるにしても、表現としては全体性や一体性に焦点を当てて用いられる。ただし、その全体性や一体性は厳密にそうであるときと、おおよそそのように見なし用いられる場合とがある。(7)~(11)のような場合は厳密な意味での全体性、一体性の例である。一方、表現の頻度が高い、部分や要素のまとまりを表わす例の場合は次第に厳密さが見なしになっていく。たとえば(16)の見出しの次にくるニュースによれば、クラスのかんりの生徒がバカロレアでひどい点数を取ったとのことであり、クラス全員ではないようである。(14)の例などもクラスの中には消極的な同調者、話し手の側に立たなかったけれど、だからと言っていじめに加わっていたのではないメンバーもいたのではないかと推測される。しかし話し手にはクラス全体が自分の敵のように思えたのである。*tout un pays* や *toute une ville* などになると、国全体や国民全員、町全体や住民全員を確認できる訳ではないので、総称表現の場合と同様に例外は捨象されて全体と見なされているのである。

部分からなる指示対象を表わす名詞の場合も、完全にそのものの全体というよりも

おおよそ全体と考えられる場合も多い。たとえば次の発話では通常は居住部分について述べていると理解されるだろうが、屋根裏部屋なども考えているのかなどについては、詳しい説明がなければ分からないとも言える。

(20) Un appareil de chauffage au bois peut-il chauffer *toute une maison* ?

(薪を使った暖房機で家全体を暖めることができるのだろうか。)

つまり *tout un N* という表現は数量表現としての用法においても既に実際よりは過剰な表現となっている場合があるのである。そこに強意表現へと文法化していく出発点があるとも言える。 *toute une classe*, *toute une équipe*, *tout un pays* などが例外を捨象して見なしの全体性で用いられる場合と、強意表現として用いられる場合の違いは *tout un N* で用いられる名詞の性質にもある。つまり「クラス、チーム、国(国民)」などの場合は一つのまとまりとしての輪郭のある指示対象である。一方、強意表現で用いられる代表的な語は、*affaire*, *histoire*, *événement*, *scandale*, *drame* などのように一定の輪郭を想定しにくい名詞である。春木(2015)では、強意表現の場合は、そこで用いられる名詞の指示対象を構成するメンバーや部分が聞き手の想像に任されると述べた。そのことと、指示対象の輪郭が想定しにくいという性質とが相まって、結果的に *tout un N* が強意表現と見なされるような意味を持つのである。

いずれにしろ、明確な輪郭を持った指示対象を表わす名詞を用いた数量表現の場合でも、指示対象から切り離されて量そのものに焦点を当てているということと、その量が *tout* 「すべて」という極を指すことから、数量表現としての強意のニュアンスを多少なりとも持っているという特徴に注目する必要がある。

5. 2. C'est tout un N.

ここで強意的なニュアンスが強いと考えられる *C'est tout un N.* という構文について見ておこう。

(21) L'Uruguay, *c'est toute une équipe* et on pense à eux en tant qu'équipe.

(ウルグアイはまさに一つの(優秀な)チームだ、我々はウルグアイをチームとして考えている。)

(22) Être belle ce n'est donc pas qu'avoir un physique ou une apparence, *c'est aussi toute une attitude*.

(女性が)美しくあるということは、単にある体つきや容姿をしているというだけではないのです。美しいということはあなたのあり方そのものなのです。)

(21)はサッカーの大会でウルグアイチームの有力な選手が出られなくなったことについて対戦相手の監督がコメントをしている発話である。*c'est toute une équipe* は日本

語に訳しにくい表現だが、後半の「我々はウルグアイをチームとして考えている」からもわかるように「ウルグアイは個々の選手がどのというよりも、本当に全体が一体となったチームだ」のように理解できる。いわば「チームとして極限、究極の存在である」と言っているのである。春木(2015)でも引用した(22)も「体つきや容姿などを超えたあり方(生き方)そのものだ」と美しくあるということの意味を極限的に定義していると言える。以下の例も、*c'est* の部分が省略されていると考えられるが、同じように考えることができる。

(23) *Collaboration artistique et enseignement à Cuba... Toute une expérience!*

(キューバでの芸術的共同作業や教育は、本当に大きな経験であった。)

(24) *Ottawa, toute une expérience.*

(観光のサイトで) オタワにいらっしやい。本当にすばらしい経験ができますよ。)

実は以上のような表現に関しては、純粹に数量表現なのか、あるいは春木(2015)で問題にしたような強意表現なのか、どちらかに明確に分類することは難しい場合が多い。(22)に関しては春木(2015)で、一応数量表現としながらも強意表現に近いと記したが、現在はむしろ強意表現としての性格の方が強いと考えている。(21)で用いられている *équipe* は数量表現で用いられることの多い輪郭のはっきりした指示対象を持つ名詞であるが、ここでは「チーム全体」という量的な意味での全体性よりも、「究極のチーム」という質的な意味が強くなっており、たとえば(1)の *tout un événement*、あるいは(5)の *tout un roman* などに意味的には非常に近い使われ方になっている。(21)では構文的にも属詞であり、質的に捉えられているので、その点でも(15)や(18)の場合の *toute une équipe* とは性質が違っている。(22)の *attitude* は抽象名詞であり、*affaire* などと同様に明確な輪郭がない名詞である。そういう意味で *toute une attitude* を全体性という量的な意味で解釈するのは難しい。春木(2015)では「あり方のすべてです」と全体性を反映した訳をつけたが、本稿では「あり方そのものです」と強意用法としての解釈が明確になる訳に変更した。(23)(24)も「究極の／最高の経験」というような意味で用いられており、明らかに強意用法である。

そもそも、*C'est un N.* という構文はカテゴリー化のために使われる構文である。*L'Uruguay, c'est une équipe.* 「ウルグアイ(チーム)はチームだ」はこのままでは意味のない不自然な発話だが、*L'Uruguay, c'est toute une équipe.* は意味の主体化を経て「ウルグアイはすばらしいチームだ」というカテゴリー化を行なっているのである。従って、*c'est tout un N* という形で属詞として用いられる *tout un N* はすべて強意用法と考えられる。*c'est tout un N* は強意の意味を持つ構文と考えることができる。

6. まとめ

春木(2015)では、数量表現としての *tout un N* と強意表現との関係については十分に論じることはできなかった。本稿では、その後の考察を加えて、両者の関係と連続性についてさらに詳しく検討した。

強意表現 *tout un N* は、「他に抜きんできた N」「一大 N」、比喩的に「まるで N のようなもの」、さらに(6)のように文法化が進んだ例では「真の N」「まさに N と言える N」のようなニュアンスになる。構文的には属詞構文、存在構文、あるいは結果的に指示対象が存在するようになる *faire* などの目的語として現われる。つまり発話時点では指示対象が存在していないかその存在が確立されていない。

一方、数量表現としては構文的な制約はないが、不定表現であるので、たとえ発話状況において特定の指示対象と関連づけられる場合も、言語表現としては指示対象が一般化、抽象化された上で、量のみにも焦点が当たった表現であることが数量表現 *tout un N* の大きな特徴であると言える。また数量表現でよく用いられる *pays*, *équipe* などのような集合名詞、あるいは *ville* などのように上部構造を表わす名詞においては例外は捨象されて全体性はあくまでも見なしであるという点において、量的に多少とも強意のニュアンスを含んでいると言える。また一般に数量表現で用いられる *équipe* のような名詞であっても、*c'est tout un N* という形で用いられる場合は質的な強意となり、一体性が全面に出た強意表現になる。

春木(2015)で見たように、強意表現でよく用いられる名詞にはある傾向がある。それは *affaire* や *histoire* のように複数の事態を内容として持つ名詞が多いことである。その性格から上位語的な抽象名詞が多い。数量表現でも用いられ得る *roman*, *journal* のような具体的な語も強意表現で用いられる場合は、「一大小説」「一大新聞」というような意味とともに、比喩的に「まるで小説のような(一連の)出来事」「まるで新聞に載りそうな(一連の)出来事」のように質的な意味になることが多い。ただ、数量表現で用いられて量的に全体性を表わす可能性のある具体性の高い名詞が強意表現として用いられるときには、*C'est tout un N.* という構文を始め属詞として用いられるのが一般的である。特に既に見た *équipe* や類似の名詞は、属詞以外の位置で質的な意味での強意表現として用いられることはないのではないかと思われる。

最後に文法化について簡単に触れておく。*tout un N* の数量表現から強意表現への文法化のプロセスについては春木(2015)で筆者の考えを示した。数量表現においても *toute une pomme* のような純粋に量的な用法から、表面全体や材質の均質性についての用法、*tout un livre* のように量的であると同時に内容的(質的)なものなど純粋に量的なものから質的なもの、両解釈が混じったものまで様々な用例が存在する。また *tout un N* は量的な場合も単に全体性だけでなく、数詞的な意味合いの強い *un* が用いられていることで一体性という意味合いが強く感じられる例も多い。特にメンバーによって成り立つ集合を表わす集合名詞やそれに類似する名詞の場合に「一体性」の意

味が前面に出る場合が多い。équipe, groupe, famille や人の集合として捉えられた ville, pays などの場合がそうである。このように tout un N の様々な場合を見ていると、数量表現としての用法においても tout un N の解釈には意味の主体化が起こりやすい場合が既に存在しているように思える。全体性→一体性という意味変化も意味の主体化と考えることができるだろう。いずれにしろ、意味的に質的なものや、属詞の場合のように構文的に質的解釈が強制されるもの、tout un roman のように比喩的な解釈ができるものなどにおいて意味の主体化が起こり、また輪郭の明確でない抽象的な名詞にこの表現が拡張されることによってさらに意味の主体化が起こって文法化が進み、現在見られるような強意用法が定着したと考えられる。

[参考文献]

- Andersson, Sven (1954) *Études sur la syntaxe et la sémantique du mot français tout*. Lund : Carl Bloms Boktruckeri.
- Andersson, Sven (1961) *Nouvelles études sur la syntaxe et la sémantique du mot français tout*. Lund : Carl Bloms Boktruckeri.
- Anscombre, Jean-Claude (1994) « Morphologie et représentation événementielle : le cas des noms de sentiment et d'attitude. » *Langue française* 105 : 40-54.
- Anscombre, Jean-Claude (2006) « *Tout, n'importe quel, chaque, quelques remarques.* » Francis Corblin, S. Ferrando et L. Kupferman (éds) *Indéfini et prédication*. Paris : Presses Universitaires de Paris-Sorbonne, pp.431-448.
- Anscombre, Jean-Claude (2008) « *Il est tout jeune, ce Nølke* : contraintes sémantiques régissant l'emploi de *tout* + Adj. » Merete Birkelund, Maj-Britt Mosegaard Hansen, et Coco Norén (éds) *L'énonciation dans tous ses états*, pp.561-586. Berne : Peter Lang.
- Anscombre, Jean-Claude (2009) « Des adverbes d'énonciation aux marqueurs d'attitude énonciative : le cas de la construction *tout* + Adjectif. » *Langue française* 161 : 59-80.
- Bat-Zeev Shyldkrot, Hava (1995) « *Tout* : grammaticalisation et sens prototypique » *Langue française* 107 : 72-92.
- Bat-Zeev Shyldkrot, Hava (2006) « Du point extrême à l'intencité : la grammaticalisation de *tout*. » Georges Kleiber, Catherine Schnedecker et Anne Theissen (eds) *La relation partie-tout*, pp.6-15. Louvain : Édition Peeters.
- Kleiber, Georges (1998) « *Tout* et ses domaines : sur la structure *tout* + *déterminant* + *N*. » Annick Englebert, Michel Pierrard, Laurence Rosier et Dan Van Raemdonck (éds) *La Ligne claire. De la linguistique à la grammaire. Mélanges offerts à Marc Wilmet à l'occasion de son 60^e anniversaire*, pp.87-98. Louvain-la Neuve : Duculot.
- Kleiber, Georges (1998) « Quand le tout est de la partie. » Sylvie Mellet et Marc Vuillaume (éds) *Mots chiffrés et déchiffrés, Mélanges offerts à Etienne Brunet*, pp.549-565. Paris : Champion.
- Riegel, Martin, Jean-Christophe Pellat et René Rioul (1994) *Grammaire méthodique du français*. Paris : PUF.
- 春木仁孝 (2015) 「tout の強意用法について」『フランス語学の最前線』3, pp.61-105. ひつじ書房.